

ニセコ医療マップ指導の佐々木樽商大准教授

「制度、文化の違い壁に」

【倶知安、ニセコ】小樽商大生がニセコ地域の外国人観光客向けに英語の医療マップを作製した。一連の調査を通じて浮かび上がったのは、外国人が適切な医療情報を把握できず右往左往している姿だったという。指導した佐々木樽商大准教授(社会学)に聞いた。

(金田博治)

たらい回し回避も期待

マップにはスキー場や各医療機関・薬局などの位置関係に加え、受診科目や診療時間、診療までの手順などの情報が詳述されている。

その結果、明らかになったのは外国人が日本の医療制度・文化を理解できないことが最大の医療を受ける障壁となっていたことだ。日本は言葉の問題にしてしまいが、そもそも

の医療制度や健康に対する概念が違つから意思疎通にすく時間がかかることが分かってきた。受診に至るまでの過程や薬局・薬剤師の役割の差異。マップの情報を前提に分からず時間も話をし、やっと診察を始めるという状況はなくなる。医療機関



や薬局などのたらい回しも避けられるのではないかと期待する。

佐々木准教授はニセコ地域の医療体制については「今の人口規模なら適正。」

医療マップを見ながら外国人に役立つことを期待する佐々木准教授(左)と野口准教授(右)と野口准教授

小樽商大

外国人が自分で納得できる施設で受診できれば満足がいくし、医療機関側の負担も軽減する。」

調査に協力した野口将輝准教授(社会学)は「今回

は医療という面からアプローチしたが、日本が移民を受け入れる時代が来るのであればニセコでの課題や対応策が生かされるだろう」と話している。

医療マップは3千部作製され、スキー場や宿泊施設、医療機関などに置かれる。今後、インターネット上でも公開する。